

特集

子どもと風

イタリアの風に吹かれて

新開一司

イタリアを訪れた時の話です。私にとっては今回初めてのヨーロッパでした。テレビなどでヨーロッパの街並みについてはある程度知っていたはずですが、改めてその街並に驚かされました。そこかしこに何百年も前のレンガ造りの住居があふれ、今も使われ続けています。しかも、条例で建造物は基本的に壊さないということだそうです。

日本が「木と紙の文化」であれば、イタリアはまさしく「石とレンガの文化」であり、建て替えを前

提に「壊す」東京の街並みに対して、重苦しささえ感じるほど「維持」し続ける文化なのだと感じました。

この点において、訪れたこの国は閉塞感が漂うほど堅固で構造的な社会と映りました。では一方で、日本社会は柔軟性に富んでいるといえるのでしょうか？ あるいは、強い風が吹けば吹き飛んでしまうような、構造的な基礎の脆弱さが象徴されているのでしょうか。いずれにしても、おそらく、この社会的

な環境の違いは、「自由」とか「個性」という言葉にも影響を及ぼしているでしょう。同じ言葉で言い表されても、日本とイタリアで意味されるもの内実は、似て非なるものであるに違いないと漠然と感じました。それは、運動を楽しめる子どもと、楽しめない子どもとは、運動会と聞いてその心象が異なり、主に運動の得手不得手が「運動会」という言葉のとらえ方に影響を与えることと似ているのではないかと思えます。

今回は、ある幼児教育機関と連携する目的でイタリアのレッジョエミリア市を訪れました。そこでは「子どもの環境」と「地域の再生」をととても大事にしていると聞いてきたのですが、これらの言葉がもつ心象というか、言わんとすることを理解するためには、社会的な下地が違い過ぎるのではないかと懸念しました。

さらに、感覚的に肌で感じたわけではなく、想像するだけでしたが、宗教的規範が希薄な日本社会とは異なる下地があるのだろうと思ひ、この点「教育」あるいは「しつけ」といった言葉においても、形而上理解できたとしても、とてもその下地まで想像できないのだろうと思ひました。そして、これから始まる「幼児教育」に関する話し合いは、果たして、双方向で実のある会話として成立するのだろうかかと心配になりました。

しかし、職員の方と話してみるとその心配も薄れていきました。「イタリアでも障害を抱えた子どもが増えています。ほかに家族問題、近年は移民の増加のため、文化の違いによるさまざまな問題があります」。家族及び地域力の低下と、そのことによる子育てへの影響、ソーシャルインクルージョンの問題など、日本社会と共通の問題が横たわっていることがわかったのです。

また、教育は目指すべき社会のあり方と深くかかわっているはずだという会話の中で、職員の方は「私たちは、人権など、基本的な価値観を大事にしています。良い市民を育てることに責任があります。すなわち、社会民主主義的な価値観ですが、コミュニケーションをとりながら、人間同士のみならず、物質とも相互作用を図り、違いを認めることに重きを置いています」と語ってくれました。社会民主主義的な考え方については勉強不足で、「何のことだろう?」と思いましたが、コミュニケーションを大事にすること、他者との違いを認めることについては異論がありません。また、人権など基本的な価値についても、研修を受けたたりしていますので了解範囲です。しかし、残念ながら、「良い市民」を育てる責任をもっているかということに関しては、無責任なようですが、そのことを意識して考えたことはなかったように思います。

職員の女性たちと話をしていた、次のように考えが巡りました。私たちは保育に携わるものとして子どもが何かできるようになることを重視し過ぎていないだろうか。お絵描きが上手にできる、発表会でみんなと同じようにきちんとできるなど、数学でいうところの、計算問題を解くことに一生懸命で、定理とか公理をおざなりにしていないだろうか。昔、日本では「論語」や「教育勅語」を暗記させ、人心を教化する方法をとっていた。その良し悪しは歴史の中で深く問われるべきだけれど、戦後こうした方法を放棄するにあたって日本人として必ずしも主体的に考えることをしこせず、安易に遠ざけた面はなかったか。しかし、彼女たちは「石とレンガ」を背負いながら、社会とか教育とか、自由とか個性を考えているのだな、と……。

彼女たちは、根拠と検証を大事にしていると話していました。組織の特徴として、先生へのスパー

バイザー的な「ベタゴジスタ」という職種（教育学、あるいは心理学を基礎として学んできている）において、教育方針を徹底しているそうです。

それらに反して、私たちはどちらかというと、保育現場では日々のカリキュラムに、親としては日常生活に追われ、彼女たちが大事にしていることは、先生個人の裁量に委ねてしまっているように感じます。本来大事な定理とか公理に目を向けず、空気のような、あるいはそこに吹く風のような、日常の良識を私たちは検証せずに子どもと相對しているのではないのでしょうか。

彼女たちは、「人間を信じ、子どもを信じ、それを伸長し、課題解決能力を育てることが大切です」と語ってくれました。共に将来への不安を感じる現在、大事な考え方だと思いました。テレビゲームなどの弊害がうんぬんされますが、園にしる、親にしる、悪しきものを排除することより、何が大切な、

下地となる基本的な定理や理念を発信する必要性に迫られているのかもしれない。

「あなた方のアイデンティティは何ですか？」と複数の方に聞いてみました。即座に「ルネッサンス」と返ってきました。日本にも、営々と続いてきた子育てや教育があつたはずです。それらは、今の私たちのアイデンティティの形成を助けることなく、木っ端や紙くずのように風に飛ばされたり、風化したりしてしまったのでしょうか。いや、もしかするとその時々々の空気や風は、今も変わらず私たちに吹いてくれているのかもしれない。

私たちは、古来吹いている風を感じとり、そこから、目先の技術や方法ばかりでない、定理とか理念といったものを子育てにおいて検証すべきなのかもしれない。

（社会福祉法人新栄会本部・元保育園長）